

追悼

## 故藤田尚則教授を偲ぶ

創価大学名誉教授 東洋哲学研究所所長 桐ヶ谷 章

私が藤田さんに初めてお目にかかったのは、藤田さんが創価大学の1期生として入学されてきた1971年の4月か5月ころであったように記憶している。法学部で将来司法試験を志す学生の勉強会の一人であった。しばしば図書館等で一心不乱に勉強に励んでいる姿に接し、将来を大いに期待したことが印象に残っている。

その後、研究の道に進むことを選び大学院を志望し、初代法学部長であった伊藤満教授のゼミを経て、同教授の下で大学院に進み、憲法を中心とした研究活動を開始された。そして、博士課程は、中央大学の橋本公亘教授の下で研究を続け、1983年に後期課程単位取得後、2012年に同大学から博士（法学）の学位を取得されている。

藤田さんと仕事の関係で関わりを持ち始めたのは、私が縁あって、創価大学の法学部教授として奉職させていただいた1986年からである。当初は比較文化研究所の講師として、1995年からは法学部教授として、さらに2004年からは新設された法科大学院教授として、一緒に仕事をする機会を得た。

弁護士から教員になった私にとって、藤田さんは研究者として先輩であった。研究者としての作法を様々な角度から教えていただいた。研究者はとにかく業績が重要であるということを、身をもって示してくれた。藤田さんの業績一覧を拝見して、今更ながらに頭が下がる思いである。憲法全般から基本的人権、信教の自由・政教分離等の様々な分野に関する業績である。

とりわけ宗教と法にかかわる諸問題に関する分野については、私の専門で

もあることから、共同執筆や多くのご教示・示唆をいただき、この点については、感謝という意味でも頭が下がる思いである。

藤田さんは、創価法学や創価ロージャーナル等には殆ど毎号のように寄稿し、有斐閣のジュリスト等の法律専門誌や「宗教法」「アメリカ法」など所属学会の紀要等への執筆・掲載も少なくない。質量ともに群を抜いた業績を残されており、内外からその業績は高く評価される場所である。

とりわけ、「アメリカ・インディアン法研究」については、地道な論文執筆作業の集大成として2012年から2017年にわたり、Ⅰ～Ⅲのいずれも750ページを超える3冊の大著としてまとめ上げ、上梓されている。この分野ではまぎれもなく第一人者である。

学風は、常に社会的弱者の視点から憲法等を生かす方向で論ずるものが多く、一人ひとりの人間性を尊重する藤田さんの人柄がにじみ出ている。

藤田さんには、研究の面だけではなく、学部の運営等においても助けていただいた。私が法学部長を拝命した2000年から2004年までの4年間の前半2年間は学部長補佐として、その後法科大学院の開学準備、開学後の研究科長の業務などにおいても、陰ながら私を様々な形で支えてくれた。

また、宗教学会でも活躍され、2001年から2013年まで、創価大学が事務局を預ったが、私と一緒に同学会の理事として事務局の仕事を担当した。立場上私が事務局長とはなっていたものの、細かい作業は藤田さんが引き受けてくれ、この面でも大いに助けていただいた。

一貫して、影の仕事であろうと何であろうと、自分のやるべきことについては、労をいとわず、実直に励むというのが、藤田さんなのである。

しかし、固いだけかというところではなく、無類の駄洒落好き。その点でも私と大変馬が合った。各々ネタを仕入れては、時にネタの情報を交換したりして、悦に入っていたことが懐かしい。

学生や後輩には、厳しい面と温かく優しい面を持ち合わせていたようである。

学問に対する真摯さから、厳しい教員という評価も散見するが、概ね、丁

寧に教えてくれて温かい情熱のある教員，というのが藤田さんに対する評価である。「学問に対しては厳しかったが，ゼミの授業では和気あいあいと自由闊達な議論がなされ，貴重な思い出になっている」「指導というよりフラットな関係でアドバイスしてくれる」「落ち込んでいるとき元気をいただいた」等々とゼミ生は語っている。

ゼミからは，法曹，公務員，研究者，一流企業就職者等々多彩な人材を数多く輩出している。これも一流教員の証であろう。

後進の研究者に対しても，同様な接し方をしていたようで，藤田さんの学恩に感謝する後進も多い。

藤田さんを語るのに，酒のことは避けて通れない。かなりの酒豪で，酒にまつわる武勇伝(?)も多く，愛すべき一面ではあるが，迷惑を蒙った者も少なくないと聞く。しかし，20年ほど前，一念発起してピタッとやめてからは，一滴も飲まず，当然武勇伝もない。私が同席するところでも，一切口にせず，その意思の固さには，これもまた頭が下がる思いをしていた。ちなみに，やめる決意をするきっかけの一端に私も関与していたので，御礼の一分は果たせたのではないかと，密かに思っている。

それにしても惜しい人を亡くした。思えば約1年前大病を患い生死の境をさまよったそうである。更賜寿命して，母を見送り，最期は家族に見守られておだやかに霊山に旅立ったとうかがう。大成仏と拝す。今はただ，ご冥福を心から祈るのみである。

最後に，先の大著のⅠには両親に対し，Ⅱには夫人に対し，Ⅲには子供たちに対し，自分の研究生生活を支えてくれた感謝の辞が綴られている。時折垣間見せた藤田さんの家族に対する温かい愛情を感じるとともに，ご夫人やお子様方の命の中に，いつまでも藤田さんが生き続けることが，彼に対する最高の追善であろうと確信し，この一文を捧げる次第である。